

令和5年度入学 社会福祉学部 学校推薦型選抜（一般／専門高校・総合学科）試験問題の出典

種別	大問 番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	戸田山 和久	教養の書	2020年 P65-75 一部改変	筑摩書房

社会福祉学部

小論文 (90分)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、3ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

幅広く豊かな知識は教養に不可欠だ、そして知識は人生を楽しむ、という話をしてきた。でも一方で、単に知識をたんまりもっているだけでは教養には足りない。私だけがそう思ってるんじゃない。講義の中で、1年生にアンケートをとって見たことがある。「教養のあるひと」というのはどんなひとでしょう、という問いに、自由に答えを書いてもらった。その回答をまとめて整理すると、こんな具合になった。総数は約 80 名。重複あり。

豊富な知識・学識をもつ	43
常識・モラル・礼儀をわきまえて判断できる	40
場をわきまえた判断・振る舞いができる	16
幅広い関心をもち多様な視点でものを考えられる	15
知識を行動・問題解決に応用できる	9

知識は教養の重要な条件だとしつつも、それ以外の要件をあげている。おっ、こやつら、なかなかいい線いってるじゃん、と思ったのだった。「単なるトリビア的知識ではない」とわざわざ書いてくれた学生もいた。そのとおり。では、教養とトリビアを隔てるものは何だろう。

(中 略)

教養にはどうやら「自分をより大きな価値の尺度に照らして相対化できること」が含まれるようだ。もう少し敷衍しよう。まず逆に、自分を相対化できない、というのはどういうことかを考えてみる。ようするにこれは、自分がすべての判断の基準になるということだ。何事も、自分が好きか嫌いか、自分が理解できるかできないかで決める。こういう人は「生理的にダメ」とかすぐ言う。めちゃくちゃ頭の悪い表現だ。自分の好みが果たして正当なものかどうか、より大きな尺度に沿って吟味することができないからそうなる。でもそういう人に限って、「私は自分の判断基準をしっかりと持っている」と思い込んでいるから余計に始末が悪い。

教養ある人は違う。自分が特別だとは思っていないし、自分を越えた人類の知的遺産によって自分の幸せと生存が可能になっているということを知っている。何より、この世には自分を越えた価値の尺度があるということがわかっている。だから、教養ある人は決してみんなも自分と同じものが好きなはずだと決めてかからない。かといって逆に「人好き好きだよな」といって判断停止することもない。自分の好みを自分を越えた価値に照らして評価し、好みじゃないものを選択することができる。

(中 略)

学生さんもこの辺のことはうっすらわかっている。「多様な視点」といった要件を求めていることから、それがうかがわれる。また、「常識をわきまえて云々」という回答も、自己の相対化と関係している。なぜなら、「常識」というのは、自分の好みを越えた価値尺度のうちもっとも身近なものだからだ。辞書を引くと、用例として「ことの善悪／道理／礼儀／場所柄」などがわきまえるべき常識として挙がっている。これ

らはすべて個人の好みを超えている。それをわきまえているということは、超越的な判断基準が存在するのを知っていて、それに従って自分の振る舞いを統御できるということだ。

このように書いてくるとツッコミを受けそう。……ということは、教養をもつためには、なんでも社会の慣習に従え、空気を読んでみんなと同じようにしてろ、ってこと？……そうじゃない。自分を相対化する、というのは、たんに自分の好みや欲求を、それを超えた価値に照らして吟味するという事に留まらない。自分がたまたま身につけた価値観や、自分の身の回りで「常識」として通用しているものを、さらに高次の価値に照らして批判的に吟味するという事も含まれている。

デートのときは男性が女性に奢るべしという「常識」があるとする。これに対し、ある男が、ぜったい割り勘じゃなきゃダメと主張する。お金を出したくないという自分の都合で言っているなら、そりゃただのケチだ。しかし、別の仕方での常識に挑戦することもある。両性の平等だとか、そういうもっと高次の普遍的価値に基づいて、「男が奢るという常識は、女性を隷属的立場において、男が女の自由を束縛していた時代の名残だからやめましょう」という選択もあるわけだ。その結果生じる振る舞いはケチ男と同じだが、中身はずいぶん違う。

というわけで、「自分をより大きな価値の尺度に照らして相対化する」というのは、たんに多数派の命じるままに生きるということではない。常識がより普遍的で高次の価値に反しないかぎりにおいて、それを尊重し自分の好みや欲求に優先させる、ということだ。

(中 略)

つまり、教養は、自分を超えた価値に照らして必要とあらば自分を変えていこうとする心のゆとりを含む。こういう心のゆとりを「闊達さ」とも言う。がんらい「闊達」とは、心が大きく些事にこだわらないことを意味するが、ここではコミュニケーションの場面に限って用いることにしよう。つまり、闊達さとは、相手の論が正しければ、いつでも自分の方を変えますよ、という余裕のある態度のことだ。

これに関していつも思い出すのが、哲学者の驚田清一さんが指摘した、ディベート(討論)とダイアログ(対話)の区別だ。何かの講演で聞いたような気がするのだが、どの機会だったのか忘れてしまった。でも内容はよく覚えている。驚田さんによると、両者はまったく異なるコミュニケーションのあり方だ。ディベートは、ある論題について、一方が賛成、他方が反対の立場をとって議論しあい、説得力ある論証を展開できた方が勝ちになる。ディベートでは考えを変えると負けだ。でも、ダイアログでは、やる前と後とで自分の考えが変わらなかつたら、やった意味がない。変われなかつたら「負け」なのである。

どっちが優れたコミュニケーションということはない。どっちもできた方がよい。でも、どんな議論をやってもディベートになってしまう人っているんだよね。こういう人は、勝ち負けに異常にこだわる。そのため、話し合っ解決策や妥協点を見つけることができない。反論されると、それを取り入れて自分の考えを変更することができないから(そういうことをしたら「負け」と思うらしい)、反論に反論しようとしてどんどん変なことを言い出す。こうして議論は台無しになる。ミーティングは時間のムダになる。これに対して、教養ある人は闊達な議論ができる。だから反論されることを怖がらない。むしろ、反論の中から学ぶべき点を取り出して、自分の考えを修正していける。

(戸田山和久『教養の書』, 筑摩書房, 2020年, pp.65-75より, 一部改変)

問1 著者の述べる「闊達さ」とはどのようなものか。本文にあるディベートとダイアローグの違いを踏まえて 250 字以上 300 字以内で説明しなさい。

問2 本文によれば、「教養をもつこと」は今日の福祉的課題の解決においても重要な役割を果たすことになる。そのように言える理由について 500 字以上 600 字以内で述べなさい。その際に、教養の2つの要素を明確にした上で、福祉的課題とそこでの教養の役割についての具体例を交えながら説明しなさい。